
ぶらり第十二異世界クルワンドサブンへ（帰って来れない）

クルド・テ・ケトー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶらり第十二異世界クルワンドサブンへ（帰って来れない）

【Nコード】

N0924Y

【作者名】

クルド・テ・ケトー

【あらすじ】

ぶらり異世界へ、とりあえず…世界征服しちゃいます。

ドラゴンバスター（キャラ的な意味で）

戦いと言うのは、不思議な物だ。血湧き肉踊り、驚喜乱舞の宴でありながら人を守り大儀を守る戦でも有るのだから。

「バトルジャンキーの一説なんて、どうでもいいだろ
寧ろ何で入れたんだ？…解らんからいいか。」

俺は飛びきりぶっ飛んだホームページのトップを見ていた。
何でも異世界がどうか書いてあるし

魔法陣によってあなたも異世界へ…

とかあるし、バカだろw

「なになに？これをクリックすると、あなたも異世界へ？
んなの有るわけねえだろ

…注意点？そんなものもあるのか

手が混んでるな、ならそれに免じてクリックしてやろう
どうせ、どっかの釣りサイトに繋がってるんだろ？」

とまあ、そんな感じでクリックした。

まあ間違った解答だったね。

まずは、ブレーカーが落ちた

「あれ？ブレーカーか？

…いやまて、窓開けてるのに一つも光源がねえ

星も月も無い…？新月だとかの、チェックはしてないが
少なくとも星が無いのはおか…うぐっ」

と、思いもしたが明らかにブレーカーではない…と、思考していると
次には体をシャッフルされて居るような感覚と
猛烈な酔いが発生した。

「三半規管がやられるイメージだ…
痛い。そしてただひたすらに気持ち悪い。」
思考すら断然しかけている、なんだ…こ

…意識が浮上したとき、目の前には草原が広がっていた。

「うん、これは夢」

肌に感じる秋の風、空に浮かぶ一つの太陽、そして目の前に広がる
真っ赤なドラゴン

…ペロリとドラゴンに肌を舐められる

気付けば俺は、服を着ていなかった。

「目が覚めたら病院へ行こう、俺の真相心理には化け物が眠っている
みたいだ」

ボタボタと垂れる水滴、ドラゴンは血走った目でこちらを見ている。

「こらこら、涎を垂らしてはしたないですよ

周りに人が居るんですから。」

大きな口を開けて彼がいた場所をパクリ

間一髪彼は逃げていた、ドラゴンの真下に潜り込んで

「…え？なにこれ、馬鹿なの死ぬの？」

お前がなと言わんばかりに、ドラゴンは足を踏み鳴らす

「音でかつ、アブなっ、破片いたっ…」

彼の体力は、減り続けていた。

と、その時

騎士団（side）

団員の内最も目の良い、ブルーアイが報告する

「ま、真っ裸で真っ黒な髪をした男が

レッドドラゴンに襲われています。」

「…なに？」

「で、ですので真っ裸で真っ黒な髪をした男が、レッドドラゴンに襲われていますっ」

「…分かった、放置しよう」

「なんでっやねん」

「痛いアラストル、なにに突っ込んで居るんだ」

「一般人を放置して、どうするっ!!」

「いやさあ、だって黒髪だぜっ？禁忌の黒髪

虐殺に有ったり、仮想敵に仕立て上げられたりの不遇な黒髪
幸いかなにか、温厚な性格らしくて

未だテロリズムには発展しとらんけど

助けても面倒だし、放置しようぜ？」

「断りますっ」

「…分かった分かった、んじゃあまあ
放置して、何も出来なかったら助けるよ」

「そ、そんな」

「いや、譲歩したほうよ？」

黒髪はなんか強いのだいらしいしさ

まあ、見学しとこうぜ」

「一般人を…」

「それを見極めようか」

「……………解りました、ダメそうなら直ぐに助けますよ」

「了解、さてどうなるかな？」

主人公 side

「あ、無理死ぬわこれ」

完全に諦めていた。

主人公の周りでタップダンスに飽きたのか

レッドドラゴンは、空に飛び上がるうとしていた

「飛ば無いでえ〜」

足にしがみつき、阻止する

しかし引っかかりも無く、直ぐに滑り落ちそうになる

「や、やべっ…な、何か引っかかる物は…」

手探りでウロコをさわると、一つ逆さに付いている妙なウロコがあった

「なんだ？このウロコ」

ま、いいかしつかり握ろう

そう考えていたが、残念な事に直ぐにウロコは剥がれてしまった

「やべ、落ち…」

そう言い切るまえに、ドラゴンが落ちて来た

「え!？」

驚きながらドラゴンを見る

「なんか、足曲げてふ〜ふ〜しているっ!？」

痛そうなアクション、うわっ人間っぽ

「い、いてえぞ畜生」

「しゃしゃべったっ!？」

「うるせえ、美味そうな魔力しやがってっ食わせろっ」

「断るわっ、一番大事な物じゃねえか」

「うるせえっ、うるせえっ、うるせえっ

もう、面倒くせえっ

食べてやる食べてやる食べてやる」

「うわっ、話せない…話せるけど話せない」

「バーニングッ」

口の中に炎を灯す、溜まり続ける炎

「やばいな…なんだっけ？魔力持ってるんだっけ？

だったらここは、魔力を使うかな

しないと死ぬしなあ、逃げられないし
生き残るルートはそれだけかな？

しっかし魔力って？

どうやって使うの？…解らん

んじゃあまあ、ここは…」

某ドラ○エの定番呪文を目一杯強くして

余のメラ状態に…

「ブレスッ」

「メラッ」

ドラゴンにメラを放つ…、おお使えるんだメラ

…しかしながらでかい、レッドドラゴンの大きさを超える上に白い
炎だ

「おわっ、なんでっ!？」

「ファイヤーコントロール」「うむ、一回言ってみたかった

今のが世のメラじゃ」

「…なんて魔力だよっ

レッドドラゴンじゃなきゃ死んでるぞっ

真竜なら別だが…そんなんより、サーセンした
助けて下さい」

「…なんだこりゃ、愉快的展開だな

ま、全然いいけど取り敢えず…ここどこ？」

騎士団「side」

「な、やっぱり妙な事になったろ？

…あれ？みんなどうした？」

「あ、あの魔法はなんすか？」

「クルック、それはなあ俺にも解らん」

「な、なんすかあ？それ

相手はレッドドラゴンなのに、一撃で倒し…

いや、倒してはいないみたいです

それでも魔法障壁をほぼ完全に消し去って

消し炭にしかけたじゃないですか

化け物ですよ」

「化け物だなあ」

「どうするんですかっ!？」

「勿論」

「勿論…?」

「放置するに決まってるだろ?」

「え、ええゝゝ!？」

「なんだ?関与すると思ったか?」

「そ、そりゃまあ」

「そうか、そんな事はしない

なぜならば…」

「なぜならば…」

「面倒だからだっ」

「な、なんですかっそりゃっ」

「まあ、話過ぎて手遅れみたいだがな…」

「え?」

その一瞬後だった、ドラゴンに乗るあいつが来たのは

「…くんなよ」

主人公 side

「取り敢えず、なんか人の集まってるそこしらないすか?」

「へへえ、あ、あそこらへんに人がいやす」

「…いきなり口調変わり過ぎじゃね?」

「へへえ、そうでしたか申し訳ございませんした…」

「いやっ、おかしいだろっ」

さっきまでの超高飛車な態度どうしたっ!？」

「う、うるせえっなっ

俺だっでしたかねえけど、しゃあねえだろ？

強い奴には従わねえと殺されるんだっ

自然界の掟だろがっ」

「熱弁されても」

「と、取り敢えず人の居るところに

連れて行きやしようか？」

「あ、はいお願いします。」

「ではっ」

ドラゴンが屈むので、俺はそれに乗る

「では、行きやすっ」

「妙な展開だなあ」

軽い装甲を着けた10人程度の人が

驚いた顔をした人達が恐慌状態に陥りかけた

だが、一人顔色一つ変えずにこちらを見る

よし、こいつに話かけるか

「あ、ども始めまして道を教えて頂きたいんですが

町ってどちらに有りますかね？」

来やがった、黒髪が…下手したら俺殺されるんじゃないか？

「はいはい、町はこのまま真っ直ぐ進んで貰えばいずれ着くんで」

セールスマンみたいな口調だ

なんか新感覚だな

「あ、どうも」

もしかして、騎士団とかそんな感じの方ですか？」

見て分からないのか、こりゃ国が違うか

…しかし、言語は分かるとなると

いや違うか、これは魂のあゝだこゝだを伝える魔法

…正式名称は忘れたが、あつたなあそんなん
魔力消費激しいから殆どの人がやつとらんに
よくやるわ

「あゝはい、そうすよ騎士団になります」
へえゝ、有るんだ

「ほゝ、ではコイツを討伐とかするんすか？」

「ま、知能があるモンスターは

総じて厄介なんで、出来れば話し合いで解決しますねえ
例えば、人に模した肉に魔力を込めてメシにしたりとか？」

「はあゝ、だつてさ？食いに行つてみる？」

「た、食べ行くつ行きまくるっ」

「とのことなので、どういった場所行けばいいんすかね？」

「あ、ああ

ギルドに行くか、宮殿行くかかね？

宮殿は…まあ難しいから、ギルドいきやあ何とかなる」

「なるほど、どうもあそれでは失礼」

「いえいえ、それではさようなら」

さつさと行つてくれ…

「よし、ドラゴン行くか」

「はいさっ」

「どんどんキャラが解らなくなるなあ…」

「ほいさっ」

「いやまあ、いいんだけども」

「行くぜっ、待ってるメシッー」

「話聞いて無いんか…」

ちよ、ま…い、いきなり早すぎっ

うああああー」

白い雲と残像を残し、一人と一匹は町へと飛び立った

「ようやくいったか」

「は、はい」

「お前ら…怖がり過ぎだ

いいか？恐怖は飲まれる物じゃない利用する物だ

ほら、よく言うだろ？酒は飲んでも飲まれるなって」

「い、意味が違うのでは？」

「インだよ別に」

「と、ところで…よろしかったのですか？

あそこは、魔族の土地…個体数は少ないですが

ヤバいのばかりですよ？」

「うむ、互いに消し去ってくれると多いに助かる」

「そ、そうですか…」

さて、どうなるかな？

魔族村へようこそ、各種様々なバトルを御賞味あれ

「とうっちゃつくううー、ひゃっほおおう」

「…ようやく着いたか、きつかった」

石造りの街だった、しかし中世の街並みとかではなく
奇妙な建物ばかりだった

家の屋根に大きなドアがあったり…丸々土管？だったり
奇妙だった、とても人が住んでは思えなかった
え？つまり？

「おおー、あ、兄貴あれじゃないすか？

あの‘吸血鬼’どもが困る中

いやー、どう見ても人間っすよ

ひゃっほおおう、ちよつと分けて貰おう」

「ちよつと待ってくれ、兄貴？いやまあそれは置いておいて、吸血
鬼？居るの？

そして真ん中の

…あれはどうみても人間だろう」

「…どつちでも良いじゃあ無いですか

あ、黒髪…うまそーーじゅるり」

「…ウインド」

「うぎゃ、な、なにするんすか兄貴っ」

「俺の前で黒髪うまそーー的な発言をするなっ
身の毛がよだつわっ」

「さーせん…ま、とりあえず話かけてきますねっ」

「…お前さんの魔力波動がうるさくて
食事に集中できん、食われるか逃げるか死ぬか選べや選べ」

なんか吸血鬼が話かけてきた

「…な、なんか話かけられた

ドラゴン、どうしようか？」

「まずは、何匹分けて貰えるか聞きやしよう」

「あ、ああ分かったって…なんでだよっ!？」

その前に、真ん中のが人間か確かめるのがさきだっ

「…出来れば人間希望」

「メラゾーマ、最大」

「ちょ、まサーセンした

冗談です冗談嘘ですから…それやめて」

「わかりやいい」

この時、ドラゴンは思った

まだ上が有るのか、この男はそこが知れない…と

それと同時にこうも考えた

そんなことより飯が食べたい…と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0924y/>

ぶらり第十二異世界クルワンドサブンへ（帰って来れない）

2011年10月31日16時15分発行